

滋賀

びわこの

考湖学

—第3部—

27

湖岸にヨシ(葦)が生いも生育し、17世紀のフランスの思想家・数学者パスカ

ヨシ

落は、ヨシを利用した産業や生業など生活と深く結びついて発展した自然環境と地域住民との共生を物語る文化的景観であることか
年新しい芽が出ることで、下茎自体も広がることで、広大な群生地をつくるのはこのためです。

ヨシはイネ科の植物で、アシともいいます。湖岸や川辺だけではなく汽水域に

『日本書紀』をはじめ古い書物には「豊葦原瑞穂国」などと「葦原」を含む言葉

が日本の国の美称として用いられています。古くからなじみ深い植物だったので、まっすぐに伸びた茎は、軽量ながら強度があることから様々な用途に使われま

など、伝統的な日本家屋に多く使われていますが、発掘調査で出土した遺物としては残念ながら知られていません。強度があるといっ

れが緩やかで、茎の根元は泥がたまりやすくなり、刈り取りや火入れなどの手入れがされない場合は、たま

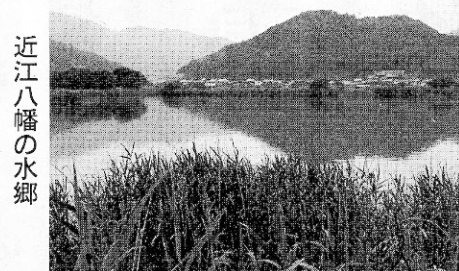
が模索されていますが、スクモを燃料として利用することは、この先駆けともい

水浄化し、湖岸浸食防止

うことが多いためと考えられます。

クモです。かつて湖岸や川岸であった低湿地で行う発掘調査では、真っ黒なスク

緩やかな水流で汚泥を沈殿させ、リンや窒素などを群



近江八幡の水郷

れませんと書きましたが、実は発掘調査ではヨシを別のカタチで目にするのがあり

ます。昭和30年代までは、スクモを豆炭のように丸めて乾燥させ、燃料として使

（財団法人滋賀県文化財保護協会 大崎康文）

ニュースのご連絡は
大津支局
〒520-0043
大津市中央1-3-2
077(522)6628(代)
(522)2689
FAX 077(522)6710

通信部・駐在
彦根 0749(24)4477
湖南 077(564)7500

広告のご用は
077(594)6223
購読の申し込みは
0120(34)3733